

野上記念法政大学能楽研究所

I 2020年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2020年度大学評価結果総評】（参考）

能楽研究所は、データベース拡充、シンポジウムの開催などの活発な研究活動、豊富な研究実績、海外での招待講演に招かれるなどの学外評価、大型の科学研究費補助金の獲得など、小世帯ながら優れた研究所として、大いに評価できる。それも、研究実績について、単に出版実績のみならず引用実績にまで言及しているのは特筆に値する。また、海外にまでまたがる研究活動は、日本文化の発信や国際交流という点でも、日本ひいては世界に貢献するものであり、本学の社会貢献の重要な部分をなしているものと評価できる。

また、理工系・社会学系の研究者たちの共同研究も、大変興味深く、研究所の発展という面からは素晴らしいことであるように思われ

貴研究所は、「学際的・国際的能楽研究の拠点」として、能楽資料の公開のみでなく、研究活動についての一層の広報活動の強化についても期待される。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

理工系・社会学系との研究者との共同研究の取り組みを評価して頂き、力を得て、学内では夏から秋にかけて情報メディア教育研究センターと新たな共同研究の可能性を探る Zoom 会議をおこなった。研究所とセンターとが本格的に共同研究を行なうのは難しいとの結論に達したが、能研の教員が申請し採択された科研費の基盤研究には情報メディア教育研究センターの教員が分担者として参加してくれている。また 2021 年度の新規共同研究募集にあたっては、研究所担当理事を通して情報科学系の研究者に個別に情報を流していただくなどの措置を取っている。

能楽研究所と同じく文科省の共同利用・共同研究拠点となっている早稲田大学演劇博物館、立命館大学アトリーサーチセンター等と比べて、ウェブサイトの構成も広報活動も地味であるという自覚は常に持っている。そもそも活動自体が、スタッフの数、学内理工系との協力体制など、規模としては明らかに劣っており、たいへん残念で悔しい思いもあるが、小規模の研究所としてできることを粛々と進めていくしかなく、その結果、文科省が拠点として他の 2 箇所ほど必要ではないと判断するのならそれでしかたない、という考え方で活動している。

【2020年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

能楽研究所は、これまでの様々な試みや豊富な研究実績において「学際的・国際的能楽研究の拠点」としての役割を十分に果たしてきたと言えるが、特にその「学際性」において、理工系・社会学系の研究者との共同研究に取り組むなど、新しい能楽研究の可能性を開こうとする姿勢を堅持している点も高く評価できる。それだけに、情報メディア教育研究センターとの本格的な共同研究が困難であるとの結論に達したことは残念ではあるが、同センターの教員の科研費基盤研究への参加や情報科学系の研究者との連携など、新しい共同研究の地盤が作られつつあることに期待を寄せたい。

文科省による他の二拠点に比して広報面で地味であるとの自己評価がされているが、着実に成果を積み上げている現行の活動を維持していくと同時に、スタッフの拡充を含む大学への協力・支援要請も積極的に行って頂きたいところである。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2021年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2020年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

① 研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2020年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を記入。

・貴重資料データベースの拡充に向けた作業

○能楽資料デジタルアーカイブ

① 「和泉流明和根本」「大蔵流虎清間・風流伝書」「和泉流『間習分』」「あい之本」「和泉流間狂言伝書」の解題作成とアップ

② 「光悦謡本（色替り異装本）大原御幸」「整版車屋謡本」「古活字車屋謡本」「古活字玉屋謡本」「喜多七太夫宗能節付

小謡卷子本」「戦国期（永禄頃）囃子伝書」「新九郎流小鼓習事伝書」「太郎次郎」「東本願寺式能評うたひ鏡」「正徳宝生流仕舞秘伝」ほか計45点の解題作成とデジタル処理作業を完了(2021年5月頃公開予定)

・セミナー・シンポジウムの開催

○研究集会「近世初期出版文化の中の謡本—光悦謡本を例に—」（伊海孝充科研費基盤C「江戸時代初期における謡本出版過程とその文化的背景に関する研究」と共催）

日時：2021年2月21日（日）13：30～16：30

オンライン 参加84名

○シンポジウム「曾我兄弟の伝承と能—歴史・物語・芸能—」（能楽学会と共催）

日時：2021年3月13日（土）13：10～17：20

オンライン 参加113名

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・能楽研究所サイト <http://nohken.ws.hosei.ac.jp/archives/index.html>

・[拠点サイト](#)研究会・セミナーの記録 | 野上記念法政大学能楽研究所 能楽の国際・学際的研究拠点 (hosei.ac.jp)

② 対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2020年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を記入。

- ◎研究所の刊行物 『能楽研究』45号 2021年3月25日刊行 全260頁
『近世諸藩能役者由緒書集成』（中）2021年3月31日刊行 全421頁
『宮増小鼓伝書の資料と研究』 2021年3月31日刊行 全242頁

◎学会発表等

日本文学や演劇、芸能史研究等の学会では、パネル発表などを行う場合以外、共同研究の発表をおこなうことは稀である。以下では、研究所としての活動の一環として個人がおこなった発表を掲げる。

- ・宮本圭造「御部屋役者再考」 2020年6月21日 六麓会(オンライン開催)

【**根拠資料**】※ない場合は「特になし」と記入。

・能楽研究所サイト研究成果報告 | 野上記念法政大学能楽研究所 (hosei.ac.jp)

『能楽研究』 | 野上記念法政大学能楽研究所 (hosei.ac.jp)

③ 研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所（センター）がこれまでに発行した刊行物に対して2020年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2020年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）、2020年度のwebサイトアクセス件数、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等の詳細を記入。

研究所がこれまでに発行した刊行物は多数に上るため、その引用数を全て把握することは困難であるが、2019年刊行の『近世諸藩能役者由緒書集成』（上）が学会誌『芸能史研究会』230号（2020年7月）に、2020年刊行の紀要『能楽研究』44号所収論文が同誌231号（同年10月）の「紹介」欄で取り上げられているほか、能楽研究所編「観世宗家所蔵文書目録付解題」（『観世』39巻4号～44巻2号、1972～77年）、能楽研究所編『鴻山文庫蔵能楽資料解題（上）（中）（下）』（1990年・1998年・2014年）が『観世文庫所蔵能楽資料解題目録』（檜書店、2021年）に多数引用されているのが目に入った。

本研究所専任所員の論文引用数については以下の通り。

書籍に関しては、『興福寺に鳴り響いた音楽』（思文閣出版、2021年）所収の論文に専任所員1名の論文1本が引用されているほか、『山・鉾・屋台の祭り研究事典』（思文閣出版、2021年）に専任所員1名の新説が採用されている。学会誌では、能楽に関する最も権威ある学会「能楽学会」の紀要『能と狂言』17号（2020年）所収の特集全体討議、及び2本の論文に専任所員1名の論文計3本、同誌18号（2021年）所収の3本の論文に専任所員1名の論文計3本、芸能史研究会の『芸能史研究』229号（2020年）、同誌232号（2021年）に専任所員1名の論文が計2本引用されている。また、日本文学や演劇、芸能史研究等の分野以外の学会誌での引用も散見し、2020年度には、近畿民俗学会の『近畿民俗』187号（2021年）所収の論文「民俗文化・古武道としての鎗術の伝承・復元のありかた：大阪宝蔵院流鎗術の取り組みを中心に」に専任所員1名の論文1本が、日本建築学会の『日本建築学会計画系論文集』85巻772号（2020年）に

専任所員 1 名の論文 1 本が引用された。本研究所専任所員の論文が能楽関連の学界において高く評価されているのみならず、能楽研究所の国際・学際研究拠点としての活動の進展とともに、最近では従来と異なる学術分野においても広く参照されるようになってきていることが窺える。

能楽研究所が公開しているデジタルアーカイブへのアクセス数は以下の通り。

- ・能楽資料デジタルアーカイブ 3766 回
- ・伊達家旧蔵能楽資料デジタルアーカイブ 739 回
- ・金春家旧伝文書デジタルアーカイブ 14217 回 (2020/5/19～2021/4/16 の集計)
- ・昭和初期 能楽映像アーカイブ (鴻山文庫蔵「能楽断片・名家の面影」鴻山文庫蔵「宝生流大連演能」) 584 回

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④ 研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2020 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として、学内外の構成員から成る運営委員会の細かなチェックを受けている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤ 科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2020 年度中に研究所（センター）として応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）及び 2020 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を記入。

2020 年度中に応募した科研費等外部資金

- ・サントリー財団研究助成 「能楽伝書データベースのテキスト正規化に基づく、能楽演出史の探究の試み」（研究代表者：山中玲子）
- ・科学研究費補助金基盤（A）「能の「ことば」の包括的・領域横断的研究に向けたオンライン・リソース構築」（研究代表者：山中玲子）

2020 年度中に採択を受けた科研費等外部資金

- ・科学研究費補助金基盤(B)「近世大名家道具帳の網羅的収集とデータベース化を通じた古典籍伝来の文化史的研究」（研究代表者：宮本圭造）（直接経費 200 万円）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑥ 研究所（センター）における研究活動等に関して、COVID-19 への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。

※取り組みの概要を記入。

- ・研究所及び閲覧室の各室内は、2020 年 6 月より 1 日 3 回の消毒を継続して実施。消毒作業の概要は研究所内に掲示し、実施もれの無いよう行っている。
- ・閲覧室の利用については、開室状況は Web サイトで随時利用者に知らせており、急な閉室があり得ると告知したうえで開室している。開室の際は週 3 日を開室日とし、利用は 1 日につき午前・午後・夜間の時間枠それぞれに計 2 人を利用上限に完全予約制にて許可している。利用者は入室時に「予約票（連絡先・体温を記入）」を持参し、研究所にてその予約票に入退室時間を記入し、予約票を保管することで記録を行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・消毒作業概要（研究所内掲示）
- ・能楽研究所利用予約票

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
----	---------

・特になし

(3) 問題点・課題

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では、能楽資料のデジタルアーカイブ化が順調に進められており、文化の共有材として公開するという社会的意義を担っている点、またコロナ渦という困難な状況における、研究会・シンポジウムのオンライン開催、定期刊行物『能楽研究』並びに『近世諸藩能役者由緒書集成』中巻・『宮増小鼓伝書の資料と研究』二著の刊行と専任所員による個人発表など、活発な研究活動と成果の公表に努めている点は非常に高く評価できる。

研究における重要性を示す引用件数においても高い数値を示しているが、同時に民俗学や建築学など他分野の学術誌にも論文引用がなされていることも、上述した貴研究所の柔軟かつ幅広い研究姿勢と無関係ではあるまい。

その他科研費外部資金一件の採択、申請中の二件の応募など、活発な研究活動が推進されており、今後の一層の進展を期待したい。

III 2020 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

No	評価基準	研究活動	
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。	
	年度目標	昨年度に引き続き、多様な分野の研究者との共同研究を進め、成果の確実な発信に努める。また、共同研究が若手研究者の育成につながるよう努める。	
	達成指標	・共同研究の成果の一つ以上『能楽研究』に掲載。 ・拠点としての研究成果を一冊以上刊行。	
	年度末報告	執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由		驚流狂言伝書と台本に関する共同研究の成果を『能楽研究』44号に掲載(3月末刊行)。『近世諸藩能役者由緒書集成』の中巻を刊行(3月末)。	
	改善策	特になし。	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。	
	年度目標	能楽に関する良質なコンテンツを、SNS や独自のウェブサイト等を通して公開できるよう、能楽界との強力体制を構築していく。	
	達成指標	・能楽に関する情報発信のためのサイトをあらたに立ち上げる。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
理由		現行曲の基本情報とあらすじを日本語と英語で示すサイトを3月末までに公開の予定。本来は2020年内に公開し、他の情報を加えていく方法についても考えたかったが公開自体がギリギリになってしまった。	
改善策		専任・兼任・兼任の各所員、みな重複して多数の仕事に関わっているため、他機関のプロジェクトとの優先順位を付けなければならない現状がある。無理をせず確実に実現できる目標設定と、それでも一定の成果を確実に挙げることとのバランスを考えていく必要がある。	
【重点目標】			
共同研究を進めるとともに、その成果の確実な発信に努める。			

【目標を達成するための施策等】

本年度は人が集まった共同研究がどの程度進められるか不明だが、すでに蓄積されている研究成果を形にして公表できるよう、対面がかなわない場合でも、オンラインでの研究会議等を重ねて成果物の刊行をめざす。

【年度目標達成状況総括】

Zoom 等を利用し、多くの共同研究グループが積極的に活動をおこなった。能楽研究所も、感染対策を徹底したうえで、一般の閲覧中止期間でも共同研究プロジェクトの担当者の来所・資料調査は受け入れ、また、必要な場合は Zoom 会議の設定を受け持つなどの支援をおこなった。各共同研究グループの活動状況は別紙「共同研究グループ活動報告書」のとおりである。なお、各共同研究グループの成果については後日拠点 Web サイト (<http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/>) に掲載する。

成果の発信についても、報告書の刊行、能楽研究所の紀要への投稿、オンラインシンポジウムの開催など、すでにいくつかのグループが行なっている。今年度までの研究成果をまとめて来年度に成果発信を計画するグループもある。数値目標は設定しなかったが、共同研究の活性化と成果の積極的な発信を意識して進めた成果は出始めていると感じている。

【2020 年度目標の達成状況に関する大学評価】

能楽研究所は、対面での遂行が困難である状況下で、共同研究および研究拠点としての成果の公表を達成指標以上に果たしており、非常に高く評価できる。情報発信のための新規サイトも、20 年度末には公開にいたったことで、達成と見なしうが、さらなる情報追加によって今後随時拡充していくことを期待したい。

仕事量に比して所員スタッフの数が不足していること自体は、改善が困難であると思われるが、より円滑な充実した研究活動を行いうるような支援が、大学として考えるべき課題の一つであろう。

IV 2021 年度中期目標・年度目標

No	評価基準	研究活動
1	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源である貴重資料の公開や基礎研究を進めるとともに、より広い領域の研究者との協同プロジェクトを展開していく。
	年度目標	『英語版能楽全書』のプロジェクトを完了させて国際研究拠点としての現段階での成果を示し、同時に、デジタルアーカイブのさらなる充実をめざす。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> デジタルアーカイブに新たに 30 点以上の資料をアップする。 能楽研究所所蔵資料仮目録をウェブ上で公開。 『英語版能楽全書』の編集と出版契約手続きを完了する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
2	中期目標	学際的・国際的な能楽研究拠点として、研究資源と研究成果を積極的に還元するとともに、能楽界とも連携を強め、能楽の発展と世界への文化発信に寄与するよう努める。
	年度目標	国立能楽堂ほか能楽団体、地方自治体、学校等々と協力し、貴重資料の展示、能楽講座、解説等を通して能楽の普及と発展に努めていく。
	達成指標	<ul style="list-style-type: none"> 能楽研究所所蔵資料を出展する展示 1 回以上。 国立能楽堂の講座ほか、解説等 3 回以上。

【重点目標】

昨年度、予定通り進めることのできなかつた『英語版能楽全書』の編集作業を完了し、刊行に向けた正式契約を終える。

【目標を達成するための施策等】

国内外の多人数が関わるプロジェクトであるため、当初から進行の早いところと遅いところの差が大きく、全体の編集作業に影響を与えてきた。だが本プロジェクトはすでに 7 年目に入っており、昨年度は covid-19 の世界的な感染拡大の影響を受けたとはいえ、これ以上刊行を遅らせることはできないことを全員で再確認し、遅れている箇所については場合によっては捨て、必須項目の場合は人員配置を再検討するなどして、今年度中の編集完了を実現させる。

【2021 年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

能楽研究所は、デジタルアーカイブへの資料アップを 30 点以上、所蔵資料展示を 1 回以上、国立能楽堂での講座・解説等を 3 回以上など、達成指標が具体的かつ可視的である点が高く評価できる。

また、『英語版能楽全書』プロジェクトの最終段階としての編集ならびに出版契約手続き完了に関しては、まさに国際的な能楽研究拠点としての一大事業の集約的成果と位置づけられるので、実現されることを大いに期待する。

【大学評価総評】

能楽研究所は、研究資料のデータベース（デジタルアーカイブ）化・共同研究やシンポジウムの開催・『能楽研究』や刊行物の出版などの研究成果の公表・科研費の獲得などの活発な活動により、学内外のみならず国際的にも高い評価を得ている。7年間に渡って尽力されてきた『英語版能楽全書』プロジェクトは、それをさらに高める一大事業と言え、完成に大きな期待を寄せたい。

また、従来の能楽研究の枠にとらわれない、学問分野を超えた領域との連携や共同研究を志向するなど、独自の試みを積極的に行っており、その成果を上げつつある。

つまり、「学際的・国際的能楽研究の拠点」として優れた活動を展開している。

COVID-19が猖獗を極めた2020年度においても、オンラインなどを駆使して従来と変わらぬ、あるいはそれ以上の活動を行っており、また研究所・閲覧室の消毒を徹底し、感染拡大防止や外部の閲覧利用者への配慮も十分に行うことで、研究所としての文化的・社会的存在意義を全うしている。

所員スタッフの加重負担については、理事会や関係部局との協議や支援要請などを通して、軽減される方向に向かうことが望まれる。